

令和7年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

学校番号	43	学校名	多治見高等学校
------	----	-----	---------

社会的役割等 (スクール・ミッション)	地域を担う人材を数多く輩出してきた、郷土の発展に寄与する伝統ある高校として 地域課題を解決する探究的な学びと、確かな学力の修得を通して 社会の中心となって自ら未来を切り拓くグローバル人材の育成を目指す学校		
学校教育目標 (教育方針)	自ら未来を切り拓き、社会に貢献できる人物の育成 一歩前に踏み出す行動力 粘り強い探究力 ともに高め合う協働力		
3つの方針 (スクール・ポリシー)	どんな生徒を 育てたいか 【GP】	<ul style="list-style-type: none"> <li>高い志とチャレンジ精神を持ち、主体的に自らの進路を切り拓くための「一歩前に踏み出す行動力」を有する生徒</li> <li>社会で求められる基礎的・汎用的な学力と能力を身に付け、問題解決に向かうための「粘り強い探究力」を有する生徒</li> <li>自他の個性と生命を尊重する心を持ち、地域や社会や人とのつながりを大切にして「ともに高め合う協働力」を有する生徒</li> </ul>	
	生徒をどう 育てるか 【CP】	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりの適性や興味・関心に応じた、将来の進路を見据えた主体的・協働的で深い学びのなかで、確かな学力を身に付けられる教育課程の編成</li> <li>わかる授業と探究的な学びを通じて、自らの知識と社会の諸事象を総合的に考えて課題を解決する力と、自らの考えを伝える力を育むための学習活動の展開</li> <li>生徒一人ひとりの個性や長所を尊重するとともに、仲間との協働的な活動の機会や、自らの進路について深く考えるための機会の提供</li> </ul>	
	どんな生徒を 待っているか 【AP】	<ul style="list-style-type: none"> <li>学びに対する旺盛な興味や関心を持ち、大学等への進学を目指して主体的に学び、自らの可能性を広げたい生徒</li> <li>文武両立を目指して、学習や部活動に向上心を持って仲間とともに精一杯取り組み、自らを成長させたい生徒</li> <li>他者を思いやり、校内外の活動に積極的に参加して、周囲の人と協力してよりよい学校、地域、社会を築いていきたい生徒</li> </ul>	
学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習に対して、受け身的、依存的な傾向が見られ、主体的に取り組む姿勢が不足している面がある。生徒自身が学びの喜びや達成感を感じられるような働きかけが必要である。</li> <li>学力到達度の格差が大きいこと、上位者、遅進者それぞれの学力層に応じて焦点化した、効果的な学習支援の在り方が求められる。</li> <li>選抜性の高い大学や県外の大学への進学を志そうとすることに消極的な傾向があり、生徒の自己肯定感を高め、自身の可能性を最大化していかうとする姿勢を涵養していく必要がある。</li> <li>多様な教育活動を通して、主体的に課題に挑戦してみることや他者と協働して創意工夫する機会を増やし、生徒の自己指導能力の向上を図る必要がある。</li> <li>日々の業務に追われて余裕が無い職員が多く、職員研修の機会を設けることが難しい状況にある。</li> </ul>		
教育指導の重点	領域・分野	今年度の具体的な重点目標	
	学習指導	教師が評価のあり方をよく話し合い、生徒の深く考える習慣と自己肯定感を向上させる指導を行う	
	進路指導	生徒の視野と世界を広げ、一人一人が主体的に進路選択し、高い志とチャレンジ精神により進路志望を実現していくための指導と支援を行う	
	生徒指導	生徒の主体的な行動を支援しての安全・安心な学校づくりを行う	
	教員研修	授業力の向上、業務の効率化を図る職員研修を実施する	

年度目標				年度末評価(自己評価)			
領域分野	3つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な 具体的な取組・方策	県教育振興 基本計画での 位置付け	達成度の判断・判断基準 あるいは評価指標	取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A. B. C. D	成果と課題	総合 評価 A. B. C. D
学習指導	適切な評価のあり方を吟味検討し、生徒が深く思考する学習姿勢と自己肯定感を向上させる指導を行う	施策Ⅱ-8	公開授業週間における 生徒の授業評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>「多様な角度からの学習評価」、「わかりやすい授業の実施」等の項目を始め、学習指導について高い評価を得た(学校評価アンケート結果)。</li> <li>生徒による授業評価を実施し、授業改善に活かした。</li> <li>ICTを活用した研究授業、および生成AIを活用した小論文、英作文指導を実施した。</li> <li>広報活動、情報発信についての保護者からの評価が、飛躍的に向上した。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習指導、評価の在り方について熟議を重ね、テストの精選や生徒の自主学習能力を涵養する方途等について方向性を定めることができた。</li> <li>生成AIを積極的に取り入れる一方で、ICTの使用推進が自己目的化しないように、適所における好適な活用法を検討することができた。</li> <li>オンラインでの保護者向け行事が主流になったことで、来校、参観する機会が激減し、学校の様子が伝わりにくくなっている。</li> </ul>	B
	ICT(特にAI)を積極的に実践投入し、授業や家庭での、生徒の主体的な学習を支援する。	施策Ⅱ-9	ICT活用推進に関する 取り組み状況の変化				
	生徒の実態に即した少人数・習熟度別授業のより一層の充実を図る。	施策Ⅳ-23	学校評価アンケートの 対象項目における生徒、 及び保護者による評価				
	将来を見据えた魅力的な学校であることを生徒自身が自負できるような授業や、探究活動を推進する。	施策Ⅳ-20	学校運営協議会委員や関係 団体等による評価				
進路指導	「課題探究型学習」を通して「ふるさと教育」を推進し、生徒に社会で果たすべき役割の自覚を促す。	施策Ⅰ-4	進路結果等の調査、分析 及び評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>総合型、学校推薦型選抜受験者に対し、学年の枠を超え、全教職員で総力を挙げて支援を行った。</li> <li>進路説明会等、進路に関する情報提供に対して高い評価(生徒90%、保護者85%が学校評価アンケートでA・Bと回答)を得た。</li> <li>探究活動について高い評価(生徒・保護者の80%が学校評価アンケートでA・Bと回答)を得ており、2年次生の活動では、新たな連携先の構築と、コンクール等への応募促進を図った。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路説明会は、提供資料や外部講師の講演内容を含め、本校の実情に合わせて設定できている。</li> <li>保護者の約25%が、本校の探究活動を「不明」と回答しており、関連情報の発信が折々に必要である。</li> <li>探究活動について、外部連携やコンクール応募の点で、活動グループにより取り組みに差があった。より積極的な参加を促すべく、改善を図る必要がある。</li> <li>模試の事前・事後の情報発信が不十分であった。</li> </ul>	B
	明確な進路目標を設定し、生徒が自身で進路意識を高め、希望を実現するための支援を行う。	施策Ⅱ-8	学校評価アンケートの対象 項目における生徒、及 び保護者による評価				
	地域や大学等と連携したキャリア教育を実践し、 キャリア発達や自己実現に向けた支援を行う。	施策Ⅱ-13	学校運営協議会委員や関係 団体等による評価				
	校内の補習や自習の環境を整備し、生徒一人ひとりの 進路希望実現に向けた取り組みを支援する。	施策Ⅳ-23					
生徒指導	当事者意識を持つての生徒の主体的な判断や活動を支援できる体制づくりを行う。	施策Ⅰ-1	学校評価アンケートの対象 項目における生徒、及 び保護者による評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶運動や啓発活動などについて、MSリーダーズの活動の一環として、生徒自身が主体的に参加できるように支援を行った。</li> <li>専門機関による講話やヘルメット着用の推進など、交通安全やモラルについての意識を高めるとともに、安心・安全に学校生活を送るための支援を行った。</li> <li>いじめに関する職員研修、生徒に向けての講演会、また教育相談メモによる情報共有に加えて、「ほっとプレイス」を活用した支援などを行った。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が主体となって多治見駅前での啓発活動や清掃活動、自転車点検やヘルメット着用推進挨拶運動を行った。</li> <li>保護者を対象とした学校アンケートによると、高校生としてのマナーや規範意識について76%の肯定的な評価を得ているが、交通事故の件数については増加しており、交通マナーの向上を図りたい。</li> <li>不意な言動による生徒間トラブルが発生しており、法令上のいじめについて理解を深める指導を行う必要がある。</li> </ul>	B
	学校活動全体で、規範意識や基本的モラル・マナーの 育成を図る。	施策Ⅰ-2	学校運営協議会や育友会 役員会などでの評価				
	交通安全、情報モラル、薬物乱用防止等の指導や講話の 実施などを行い、安全意識を高める。	施策Ⅲ-19	実態把握を通しての評価				
	教育相談講話や研修会を通して相互理解を深め、い じめの防止、インクルーシブ教育の充実を努める。	施策Ⅰ-3	各種アンケートの結果と その対応から評価				
教員研修	効果的で、かつ負担感が生じないような職員研修を実施する。	施策Ⅳ-28	研修実施後のアンケート 調査での充実度・満足度 の測定	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部の専門家による小論文講座は、指導力に不安のある若手職員に有益であった。</li> <li>AI研修がきっかけとなり、校務におけるAIの有効活用が活発化の傾向にある。</li> <li>教科の枠をこえて実施した「公開授業週間」では、期間中だけでも、のべ40回を超す参加があり、学びが多いものとなった。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>年内入試増加に伴う進路指導の早期化、多様化に対応した研修を行うことができた。</li> <li>AIの活用や授業力の向上という観点では、教員の意識も高く、学びに向かう姿勢を強く感じられた。</li> <li>少子化に伴う生徒の変化に柔軟に対応するための研修の必要性が高まっている。</li> <li>ICTの活用による勤務効率化への効果は限定的なものに止まっている。効果的な活用法について共有を図る必要がある。</li> </ul>	B
	校務の効率化に繋がるICT活用法の開発と共有を図る。	施策Ⅳ-27	職員の在校時間の把握を 定期的確認し、校務効 率化に繋がっているかを 検証する				
	公開授業週間において他教科の授業参観を推奨し、 全職員で授業改革の気運を高める。	施策Ⅳ-26					
	教育活動を実践していく中で生じたニーズに応ずる 必然性、合理性のある研修を実施する。	施策Ⅳ-26					

来年度に向けての改善方策等 実施日：令和8年1月14日 学校関係者評価 実施日：令和8年2月5日

<ul style="list-style-type: none"> <li>ICT活用を自己目的化させることなく、アナログにはない有効性を見定めての活用を推進し、「使用頻度」ではなく、その「効果」を評価の窓口とする授業研究を行う。</li> <li>テクノロジーを活用した教育活動や広報活動に力を入れる一方で、授業や学校行事の空気感を実感できるような参観の機会や、生徒・保護者との対話の場を大切に作る機会を増やしていく。</li> <li>2年次生のすべての探究活動グループが外部との連携や発表会への参加等、学校外との接点を持つ取り組みを行うようにしていく。</li> <li>模試や入試関連の情報提供を強化し、教科学習能力を磨く姿勢を意識づけるとともに、探究活動での学びや小論文を強みとして進路実現を目指す力(適性)を測定する機会を設け、多様化する入試形態や個に応じた進路支援を行う。</li> <li>自転車による交通違反の罰則化に伴い、警察と連携しながら正しい交通ルールを学び、マナーの改善に努める。</li> <li>法令上のいじめについての理解促進の為に、生徒のみならず保護者や教職員への啓発を行う。</li> <li>OJTは実践力向上や業務効率化に欠かせない一方で、負担にもなる側面がある。少人数、短時間を複数回行うような、職場の実態により好適な研修を企画していく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>従来どおり身体を用いて活動することで、より高い教育効果を得られる場面もある。ICTは対象・環境に応じ、適所で活用すると良い。</li> <li>手書きでの解答を求めるのが大学入学試験の現状である以上、ICTの推進には限界がある。これまで練り上げられてきた古典的な学びの在り方、教授法を軽視することなく、大切にしていける必要がある。</li> <li>AIの活用が一般化しつつあることに伴い、その功罪が顕在化している。学校において適切な使い方について学ぶ機会があることよい。</li> <li>探究活動の発表内容が年々向上しており、コミュニケーション能力の向上にも繋がっている。活動をとおして培った力を進路実現に活かしていけるような環境・体制を整えていけるとよい。</li> <li>探究活動は生徒の多様性が存分に発揮されたものとなっており、生徒一人一人の価値を認める場として他に類をみない役割を果たしている。</li> <li>外部人材をより積極的に活用することで、生徒の学びになるとともに職員にとっての研修の場にもなる。</li> <li>進路情報については、与えるだけではなく、生徒自身が主体的に調査し、クラスなどで発表する機会を設けたりすることで、自他にとっての学びの機会となる。</li> <li>交通マナーやいじめなどは昔からの教育現場での課題であり、一朝一夕にどうにかなるものではない。少しずつであっても啓発を続けてもらいたい。</li> </ul>
--	--